

【作者】陶潛（三六五～四二七）中国、六朝宋の詩人。字は淵明。一説に名を淵明、字を元亮とする。また生年にも異説がある。潯陽（じんよう）柴桑（さいそう）（江西省九江）の人。五柳先生と号した。東晋の大將軍陶侃（とうかん）の曾孫にあたる。陶潛の時代には、一家は没落して貧しく、彼は生活のために不本意な地方官の職に就いたり、いくつかの軍閥の属僚を経験したりした。四十歳のとき、彭沢（ほうたく）県の県令を最後に官界を離れ、かねてからの願望であった郷里の農村での隠遁生活に入つていった。

【語釈】*結廬：いおりを結ぶ。隠居所を構える。 *在：存在をいう。

*人境：人の住んでいるところ。俗世間。人の世。 *喧：やかましい。かまびすしい。

*東籬下：東側のまがきの下で。 *悠然：ゆつたりとして。悠々と。

*南山：ここでは、陶淵明が住んでいた廬山をいう。

【通釈】

隠遁して暮らす庵は、それほど人里から離れてはいない。（隠者は、世間では、人里から離れた、ところにいおりを結ぶ）しが、わたしは、人々住んでいる俗なところに、住まいを構えている。俗世間に住んではいるものの訪問客がしばしば来て、その乗り物の車馬の音が騒々しい、ということはない。
どうしてそんなことができるのか。心情、思想状況が超然としていれば（住む）地も辺鄙なところになる。
東側のまがきのもとで菊を摘む。この句は次の「悠然見南山」と共に人口に膾炙された。（心は）ゆつたりとして南山をながめる。山の様子は夕暮れ時が美しくよい。
・山氣：山の気配。・日夕：夕暮れ。・佳：よい。
美しい。みめよい。飛ぶ鳥が群をなして一塊りになつて帰っていく。

この（自然の摂理の）中にこそ眞実の姿がある。謂おうとしても、とつぐに（謂うべき）言葉を忘れてしまつた。